

では「風景」「少女」に於て威壓的な感じを受けた ▲清原重一君の八點では「晩秋の山」「秋の山畑」「靜物」に色譜のハーモニを聞く ▲淺井松彦氏の八點では「秋近し」「軍艦」「九谷焼」の小品に頗る見るべき佳作が多い ▲神津港八君の三點は「横顔」「雪の日」に健實性が認められた(白象)

⑩ 工芸史研究室

大正九年新設の工芸史研究室(55頁参照)は研究報告第二輯として香取秀真講師の研究による『馨』を翌十年十二月に出版した。八ツ切り馨拓の写真約百七十枚のコロタイプ印刷。森鷗外帝室博物館総長の題字、正木校長の序、年表、香取秀真の論文を収録。大和綴れの箱入りで、一部十六円であった。『東京美術学校校友会月報』第二十卷第六号は、「馨(馨)の研究は本書に依つて極まり、其圖様の變化と雅致に富む點は、工藝美術家の参考書として之にすぐるものなかる可しと稱せらる」と紹介している。

⑪ 帝展工芸部門設置運動の開始

第二卷に記したとおり、本校工芸部出身者から成る工芸美術會(正式名称は新興美術會)は、大正八年十一月に趣意書と規則書を發表し、翌九年早々、帝展工芸部門設置運動を開始した。その活動狀況(九年一月〜十年四月)は『東京美術学校校友会月報』第二卷第二号に次のように記載されている。

○本校工藝部卒業生に依つて成る工藝美術會は大正九年一月より

同十年四月末に至る經過報告を印刷になし發表せり 内容左の如し。

工藝美術會自大正九年一月初至同十年四月末經過報告

一月二十三日評議員會開催 昨年度ヨリノ懸案ナル帝國美術院ニ工藝美術部ヲ設置スルノ建議案ニ關シ文部當局へ提出ス可キ建白書ノ原案ニ就キテ協議ヲ遂ゲ再ビ杉田評議員ニ字句ノ推敲ヲ托ス、席上島田佳矣氏ヨリ客秋西下ノ節澤田誠一郎氏ト共ニ此件ニ就キ(京)都ニ於ケル帝國美術院會員諸氏ヲ訪問セルニ竹内栖鳳山本春舉兩氏共ニ不在ニテ執事ニ要領ヲ申置キテ辭去スルノ止ムヲ得ザリシ旨ノ報告アリ、次ニ工藝會ノ意志ヲ尙各方面ニ披瀝スルノ必要ヲ認メ評議員各分掌シテ文部當局、帝國美術院長、幹事、會員其他ヲ訪問陳情ス可ク其部署ヲ定メタリ 但折柄帝國議會開會中ニテ各當局ハ多忙ナル可ケレバ其閉會ヲ俟ツテ各所定ノ訪問ヲ爲ス事ニ決ス、更ニ請願書ハ肉筆トシ用紙外箱等ニ意ヲ用ヒ及其副本ヲ印刷シテ各帝國美術院會員諸氏ノ手元ニ參考トシテ差出ス事トシ請願書及外箱調製ノ分擔ヲ定ム 同二月一日請願書文案成ル左ノ如シ

請願書

明治四十一年ニ文部省ガ美術展覽會ヲ開催セラレテ以來我國ノ美術ガ長足ノ進歩ヲ來シタコトヲ認メナイ者ハナイデアリマセウ

美術ハモト個人ノ自己表現デアルトコロカラ或ル者ハ共力發展ノ策ヲ講ズルノ必要ヲ認メズトシテ種々其主義ニ固定シ或者ハ背反雷同其變化極マリナケレドモ漸次各派各流ノ美術家(眞摯)